

それからというもの、俄然、国語の学習には一生懸命取り組むようになりました。国語がおもしろかったと言うよりも、先生にほめられたことが、よほどうれしかったのだと思います。「好きこそもの上手なれ」ではありませんが、テストのたびに点数はどんどん上がっていきました。国語の学習での自信は、他の教科にも波及しました。「おいおい、最後に来て自慢話かよ」と思わないでください。教師の一言とはそれくらい影響力があると仰いたのです。みなさんもそんなエピソードの一つや二つはお持ちなのではないでしょうか。

そんな私が、縁あって小学校の教師という職業につきました。私もこれまでお世話になった先生方のように、子どものやる気を引き出すようなほめ方ができるような教師になろうと思いました。

子どものよいところを探してはせつせとほめました。よく子どもをほめる教師だったと思います。しかし、やる気を引き出すどころか、子どもとの関係もうまくつくれない未熟さを思い知ることになりました。そしてやがて気づくのです。自分が子どもをほめていたのは、自分のためだったと。

子どもの力を伸ばそうとか、自信をつけようとかしていたのではなく、ほめることが目的化していたのです。本文中に出てくる、「ほめて育てよ」のフレーズにのっかり、ほめておけばそれでよしと思っていたのは、ほかならぬ若き日の私なのです。

未熟さを思い知った私は、自然とほめること叱ることを学ぶようになりました。自分が子どもにかけた言葉を記録し、他の方に批評していただき、ダメなところを指摘していただきました。そのたびに、自分がいかに支配的で、自分本位なほめ方や声のかけ方をしているのかを知りました。それは、痛みを伴うきつい作業でもありました。

そしてだんだんとわかってきました。きちんとほめるためには、きちんと叱ることが大切であることを。それまでの私の叱り方といたら、ただ感情的になって子どもを怖がらせることに終始していたと思います。これも、自分の感情をなだめ、子どもを支配するために行っていたのかもしれない。ほめ方が変わると、叱り方も変わってきました。

それは何のためにほめ、何のために叱るかが理解できてきたのだろうと思います。目的が変われば、ほめるべき点や叱るべき点も変わります。それに伴ってほめ方や叱り方も変わらざるを得ません。ほめる、叱るという行為には目的があり、そのための方法論もあるのです。

ほめること、叱ることを考えるときに、どうしてもほめ方叱り方といった方法論のみが注目されがちです。これは、使い手と道具の關係に似ています。スポーツカーが走り去るのを見ると、多くの人が格好いと思うでしょう。つまり、道具が注目されます。しかし、それが現実社会で生きて働くためには、乗り手の質が問われるのです。どんな高性能のスポーツカーも、運転手次第でその能力を正しく使われる場合もあれば、誤って使われてしまうこともあります。方法論の正しさを議論する前に、その目的の正しさを議論しなくてはならないのです。

ほめること、叱ることは、教師にとって指導力に直結するきわめて重要な行為なのに、大学で学ぶことも、ましてや校内研究で取り組まれることもありません。ほとんどが教師の個人的なセンスか独学によって取り組まれているのが現状ではないでしょうか。

やる気やモチベーションが大事と言われるこの時代だからこそ、教育にかかわる者は、この問題に正対し、本気になって学ぶことが必要ではないかと考えます。みなさんの目の前にいる子どもの未来

がより輝くために、本書が役立てば幸いです。

自分の成長を感じたのは、子どもたちから次のような言葉をもらうようになったときです。卒業式の数日前に、目を涙でいっぱいにして渡してくれた手紙です。

赤坂真二先生

先生は、ちゃんと子ども一人一人と向き合っていて、先生としてもそうですが、人として尊敬しています。先生には、常識や人として当然のことを教えていただきました。ひと言で言い表せないほど大切ですばらしい言葉は、ズーっと忘れません。先生と会えなくなるのはとてもさびしいですが、先生と過ごした日々を大切に思い、生活していきます。本当にありがとうございました。

Rより

読者のみなさんにこうした出会いが、さらに一つでも多く起こることを願っています。

本書は、ほんの森出版の兼弘陽子さんからたくさんほめられながら励まされながら、発刊を迎えました。何よりの力となりました。心からお礼を申し上げます。

二〇二二年一月

赤坂 真二